へ 13
3733
6

門 へ13
733
巻 6

五編 初桃色紙評判

笹原狐

目録

栄ある君臣大倉谷の喜びゆ替て哀へ祖父と孫島の住家ゆ
つゝたえまいちぐゆ物こを悲しゝ我身ひとりの秋風ゆ紅葉に浮る腹切ハ大詰ゆ舞代の鶴亀
屋ハ二番目三冊つゞき名利を走らゞ飛脚宿その評判も
江湖ゆ打ハ響けと槌屋の封切爰ゆハ黄金の雨霰
古手ゆ仕組も新口村ゆ戀の深雪の銀世界
秋の田は狩出さる狐穴をを發端ゆ
人丸堂兵庫ゞ胸ハ足引の山雞ゆ蛇食
雄子膽仰きゞ主君の用金
三千両ハ三笠の山吹奪きー身の術のさゆ自殺の分て停る小平
治の解事いとゆやとのと耳合て
別きてハ知るも識らぬゝ大阪手甲
岩打波のゆの目のく砕て喜ぶ神力丸
捨く渚みつくぞゆの峯より落る
浪宅を尋て小ゆ屋宗右衛門ゆ
鯉をつりて扶持取の千原八今や
と心當ゆらゆらん初霜の
帽子を被る姫君ゆ赤き感ぞもる
白菊無垢洗ふ忠兵も君ゞゝゆ惜うらぶ
命さ長沢早太ゞ諫言の耳ゆゆゝぞ

五編の評の五丰一壊
甘泉堂ゞ廩倉ゆ納めゆ

柳水亭種清記

○江の兼屋卯の時つる渡海ふ
頃ふ伝伊ふる長ざめ紙
酒ア戸の屋の戸ふ須ア紙
栗や茅茶三木和尚の
水を

小鳥川龍門

○若みさろ〜滝川の水桑
ふ已千ま姫ろんしゅ紙
ふ原水ひれてもとちふ
花生と流ましりふ

つちや梅川

○新の音物ふせどえ〜
ク獲長年改ぎうくふる
大海を渡ふあア〜の出ふ
天晴志の小年ねとふと
ヒうれていぐ義七の角
ふれ〜ふ後ふこれ〜のいり

志摩小平次
鳴のおかぢ

小菱川左内
高砂お草姫

○有馬山いなの笹原風吹て
松根に打そそぐ滝つ瀬の音
山の寺の入あいの鐘ほのかに
聞て行く春の夕べ

かめや忠兵衛

○梅園の美人時鳥の声
新町をふまぐつと雅やかも
あるる物左門松もむしの
思ひ人とかれど助ける忠三郎
かなぐ加へて忠三郎と梅川が
ふうぞもぶの

かめや

○音に聞たる東たびの仇浪ふ
ぶきをとる人生涯風にうろ

うるはのおうぎそのぎをの
優ふまろうこそ〜

かめや

○八宇宙蓮まぐ見る中ふねぐろ
て浮る蜻蛉ふる波ふ弥義経ふ
眼も利園の二乃合さうれ
べまの流れる豆のふまなも

かめや利兵衛

○亭ところ国情の山の中ふ
生る小松ふ宗右ふの右の市
義の子孫ふ三右ふ二ふ
丹波屋ふ節ふ栗のそぐ
ぞりふ毒を抜る

蜂石弟り

初風扮獻子評判

板元（イ）今日は小倉の老紙を打系佐うもてんうもり
ノ早やや忠兵衛が出て居るねるや　板元　はゝあみうもり本は根ふらふ仏く新
みうり本　奥女中　ゴウ〳〵よふ拍て来てたりうさそうやまう　奥の山流うさぞ
ゑれうもるふコレくお孫にの早足やお中老のハ代好さのお新屋迄
いうてそうゆく来や　唯今甘泉堂がお孫への新の郷紙や食暮
と拍系いうきうと早ふ〳〵　奥女中　かうとゑやもりうとト局らううをそせ
徒しが御ま時ゆどもちゆるうち上品屋の寿駄〳〵早ふ
お迎入〳〵の声せい〳〵も最服〳〵ふ寿集うる女中ぐう黄紙
郷面ううひうげく　やよぐら　ヲヤく　まう仏さこゝはあうう　りんぐの
猪敷さるゑぐやヲホ〳〵〳〵いうをを巻く　板元　その孤ゆふ白うう
ある番系孤ふ助られうとのお新をけらんあうぐせ

長沢早や　二番目　長沢宗兵衛

ふうり本いうもうぐらはる評せ
ヒイキ　成程見へ滑やさんの編笠姿くうの名流〳〵縞のうれさ中どは難を買ふ
正へ実系律系なお侍の風ゴウニキトドレ毋さゆゆはあるキりふと笠を拍で嬢の
巌へ遠へ仕うもうある者行が知れてうふうりキ　ヤく　ゑへまると家紋戸まらのあ名拍
ふ袴の地合へ流汐中ニテもまア立派なふ侍でふうキせあう　スギミ　れゆゆ者の三流がその
ゑをはるきせあ　ヒイキ　ゑぜエ　スギミ　ハテふれ名うら半さ今ゑ拍つき迄を強なお侍が伝な
身はを所て損料屋ゑ〳〵伝系せて来るゆるゆるまのうとぐん〳〵本　元禁　そうやあうく
のイ号遠ひ毎のんをやまふぐんと者行のこあふ系飾る　夜拍衣ゆ〳〵ゑ行でハ号本ま
ひ獲料屋ふゆ中て云沢の疎情さ家系ふと号さ今ゑ子ゑて威がゆ〳〵れて俣
白な平ゆ　新れ紋の料理をせエうんて家系ふ迄分ゆぐやとのふよりゆ者ふら原せ平く
まう〳〵ハ暫れの様てゆんせゆ　板元　ゆる様〳〵家ふ食事の様の耐ゆ年月上本ゆ〳〵衣
裏のオでやきいうゆも暫れのお衣裏ぐひ号ゆ者ふ丑てうふゆり本コりくは覚え家のアお拍ふ

如何なる伴ぐらゝ如涙長庫がたゝこんをきて向の人強て遠ゞる所のとんぐさを稼くやふれまさ
ナロく笠ハ長寧寺の孤狐猴の忠伝ゲロ人へまる 見 ダガ兵庫屋と主伯の係ふ
るとてき狐まいて〳〵このふとりハ殿のゝ所とも稼ゝ爲ざろて主を殺〳〵めん
きり所後でいゝんせねゝ 見 イヤ作せらるゝなひとつゆ画屋夏とゆふ博もゆら
ふゲ同伴ゲ命を捨ての孫ぞ〳〵ぞ〳〵画ふ粉ゲ法きこ平きひ
見 それいとれゆもして主ふゲ寺の竜院のかふゆて嵐ふ寝糸の縫のある上
下も長髪ゆ法の多てドロく〳〵とせり完を出ゞ面いうふもとぞてよふんんたゞあ
の早ゆ薗ハ元来無糸の古狐発狂ゆて主ふ感ゞて殺ゲりふ
出ゞ〳〵面天白ゆ〳〵者のゆ宮りの子ふ何まつ九ゆ新つ九ゆ狐ら〳〵ふ九ゆね
バのるまひこれでいるで早ゆの面天狐の糸殺りとゆんえきせね 見 ゆとゲ
狐云猪猪の糸紙寺ゆて狐の糸ゆうんゆて熱嘆ゲ刺ぬ面ゆ者ゆ者ハ糸ちり
早太中〳〵ゆ法き平ゲ九をゆくゆきろゆふゲりゆとゆふぬりの所ゆうゆ早ゆ

さゆ〳〵ゆんせね主でよひのいさゆんのゆひゲあくまで乃を遠るハふ思であらゆと
いふをきて新をきゆてとゆりあゲて兄より兵庫ゆるゆて〳〵ゆゲゆそのよきく
実ゆ大出来でんゆゆ 見 ハイ所ゲとふぞん〳〵中ゆふ兄ハ大長谷 見 狐猴リヤ
山蛮の右紙どの白ひ毛皮の袖ゆ〳〵ゆ家のんゆのゲきんふんどゆ図ゆゲゆりてよひ
ゆ〳〵 見 ダガゆまり新ゆ紙を持ゆゆんぎるゆゆ 見 そゆゆゆまゆの古ふねゆゆ
居所ゲりとゆふ伝ゆひで岩のぎりゲゲゆて〳〵ゆ紙ふ洞迫〳〵ゆへゆゆ人西居でりとゆ早
ゆのゆ下ゆゆぞゆゆゆゆ紙ゆゆ出る早ゆぎゆゆのまりを四ゆさん岩のゲきん主附
とゆのふ義中ハ素人ゆ新ゆひと味噌ゆゆて主ゆ山早太ゆ長ハ云分のゆい仕打狐
の狐をきゆ〳〵ゆ孫義をゆぞゆよゆ巻ゲふゆまゆでゆきゆりゆく 見 ゆて二番目のゆめ大
ふゆきゆふゆゆ忠主ふゆゆ来ゆ所率四ゆふ所上平 見 ナヤく兄ゆ飛獅蛮の
うち養母姉用ゲゆそゆをとゆゆ人打ゆゆとゆをアイコヤゆゆの女房でゆりまと
留ゆ主ゆ実ゆ千両ゆゆゆ向て箱ゆ仕打ゆゆゆりでよゆゆり平 見 出ゆ主ゆふ

中ふかひ手ぬぐひをとり金の伝とき〳〵面目なやと顔を覆る佳うちっこりゃ
そこどころ〳〵やあり手まも一休の画面みの世そ者ろうぐどふつんでもぞやうだん
ら〳〵 ヒイキ 揚屋封切の場ハヤ手ぬぐい赤ちつぐ悪にをきて〳〵振
ろぬて振出〳〵家格ら又ハ右馬つ交取書をとるく〳〵へんせる仕打正直
ら〳〵平今の色この対のきれろそうんそきのとるる和どつとのそせ手それ
よりそこを脱ぐる和日本一国〳〵屋敷千分色しろぐきく〳〵 コロロ どこの加
減ろ屋敷の出の形ハ恋の気附の屋そてよりふ白のさろうぐこそとんそ
て定九郎ふ来ぐさまてやろう〳〵 ヒイキ アレマアかあひそふみるるをのつぐこあります
せんくさぐろの立るや一すハどふでもいつわ子清ひ文るふめらてろう新つれぐとうち
るろうるどの件来ハをそのひうそ代の小松伝あろうハろぐきく〳〵

〈高麗左門之助 下総久我助 実ハ小山主殿助 二番目 忠三郎 坂右衛門 おろく

板元 是ハ浪宅の下部久我介之ふり手 ヒイキ なろ程早さまのひ名使

お病戸の看板ふ新面の菓子を捨て出さあ寒ふ接ふふり手又ハ器と
出合のうらとのひ早太ぐ麓〳〵紙幾をうんのるぐうろ〳〵た仕打どこ日機関
ハふり手せ出 スゲナシ 変ふひとう仕遣〳〵ふ行ぐうんえ手ふのぐふ松変家ふ手つぐ脇
らきて五十両入さ麻絲身人ぐ戻せとうふを永あげていう事も潜ふる仕方
ハ私のんふ沢ふ手石面元此人ハ小山主殿の松ふり手せ ヒイキ とふ猫金どの踊又解それふ
ハあまり手子の仕打ふ変ふぎるでハり ヒイキ 変のるハどまるでも
げらうでるのれハのり手ふひそふるふとうふ仕お振ふさ紙幾をうふ手ふこるふ又せ
てあり悪変の関ふハるミぐ来ちふ スゲナシ 手宿るのりの風俗ハ下部新歌でハ感完
ぐ見えぬゲコリャせふうのるまひう ヒイキ 切出 せるこ帰ハ実法これぐあらふ 坂元 次ふ式
大れうこぐハ長谷寺門出人の言ふ左門仕さるふふり手 ヒイキ いうふも海苔ふ
彫のとふ不ふ彫ふ金糸の毬ふんどうの五級のおの和早太どのを手打の俳
仕垂の仕打ぐうえそあまれつぐふり手毛ろう寺の書院ふ振へそ

第六金赤の紙の縦横の長と上下不揃ひなるを仕立てこの黒入まで来て
て出来る義経人形早太郎のもろがん見せ入大者ら者ふり本本
産ふ仕立てとドロく面の雲ふ也酔ひたるつぷんまて
出来る早太郎のもろがんの形の不揃ふ面ふ本 板元 次ぎ義経腕ふ
て義経の家来百姓忠三郎の腕鷹ふ乗りあまりて乗り
まて義経ふ化ハ腕ふ乗りて仕立ぐ
のるやら鎧盛の体まで
筆の変ふ者ふ変形猪さ
るのとぞんじ本る ヒイキ いろ本ら形ハ
でゆり本 ヒイキ ダカあのふハ
仕立ぐるのひ方和おの写ハ
入て紙をとり出

感心〳〵又ひさんぐの
△千原三木進 小見山九内 板元 義ハ
木の進さ
出来ぬ年ハ十を越
ふ 本侍ふ
いぐ
ら 下上 ふぜん 見 ふ
牛のふ外ぐの
水とふ者を
ふ生ま
千寿ふ
ぶりとく

あら臣ゑ主筆への宛始あらぞれし足山のおもかげがうかぶそゑてありしふなり
木小年治が住家へ来る小兄川九内ヤぶんなしとおぼへく
△茨木弥蔵 利倉傳右衛門 二番目 亀屋利兵衛 頭取 是
ハ膝栗毛のお郷深草乃敵の茨木弥蔵どのふなりまへ人番
さまの書唇先へ波具ふ門ど 波の兆巾名東屋額五郎の紀を
押て出て笑り めの濱名庫さまふいとひつけられて二千両を盗むしゃ腹
下ふおかれぬ大極上親子が濃の名うまへし懲ずろさ不ふおちをあつて
よ色いでふありませぬ ヒイキ 頭取のらふ通りなおし 頭取 さてさ大の門
ぬきとやハ大袈裟ふありますやそう弥蔵の奴の形手縄探の手拭を
ふかり濃襷色の着ざんふ刀をさしかくしまりしきも労れてきらふ
えぬふそよろめきながら出て巣り山番松形をよび出しをいひ合せの
件よき者もかぜそせ木 扨それより小家へのがかり喰合の書あつく

細く手きつけていくしすすががる拝ハいろゞてありますふ スキ三 これハ
跳らぎといひぶんなし一番の道具ふ返しし抓ふおろされきとひか臣
で口へ指をいまゐのハよしてのらひさの 不案 でもあるせぞ六抓ふおろ
されさ弟が表れまい分さらいふのもいらぬおやおやがおもしろいハせんざ
おうしふありまさまずく所化ハ此人が愁嘆でありまし次ふ利兵
傳右ろコリヤすゞめな敵の名ざろといハせる所も名のがよきぞちらし
さ引込ぎハ飛んぞそふ目を付て裾をかきしし臆病ぶりニてらびさ人
の身上でありませんでよく 頭取 次ふ弐番目のかゝしやヒ利兵衛ふ
ありまヒイキ コリヤヤ分臣ふいておかしくようできますしさ
△香浦傳二郎 頭取 これハ三木の逆さ屋の道化来ふありますまごあげ
まるの少年ふハありまれどもかおハうつく お夫をものでありまへ
ヒイキ ある総菜の上ヤふ沖茶の若つけ所望らしうありましそふて

たゞぜいの侍荒と云ふ事あつぱ是なるものゝ[ワルロ]あらしぞこうふさそれゞゝ
えゝ本とといふりのゝまぐ羊若ぢろふんゝゝ

小平次妻ふうぢ

二番目 忠義藤言号おすい[板元] 是ハ中油

ふ云ちるゝ物のおうぢふふり本[ワ功丞]おうなおびゝ家の若つけふまと
白の小形の腰合せの帯藤美のゆきおういちと目ふさろりハせぬ
ぬ[ヒイキ]あうや田舎りのとふふでみたちふサぐ稽村の役のだん
ちりそれうり小平治の信家ハ来と方るの仕こ[ヒ]あうゝえゞよゝ
きて本そんゝらゆふべと弱るゝあうゝゝさせるりめろ出来ゝ
[板元]つゝぐ二ぞんあゝえゝ本おすいどのふふり本[ヒイキ]ヨゝゝ義ぞ武人の目
ぬきぐゝ金をぬそむ仲うら忠ち出をくぐゝ弱ぐぬちんぐうゆの
いゝゝえをいひうらぐさあられさう鬼の目ふも涙をりゝえ本ゝんうゝりて
ゆうえ本りゝ[ワ功丞]いうふもゝゝこのあすうゝ支郎の情合藤石ハうとを

これのゆむあうゝゝ[illegible]どもハ初りまをんぐあんなりのでりまふ弥さ
かんゝんゝ面りまゝゝ[ワルロ]ふおとんどのハ外ふやかりとともるの
まぐ嵐のあいのぐぶぞうあうええ本[ワ功丞]そこんの女房とまゝゝぬ出云

小袖屋宗心

[ヒイキ]おびゝ家の初織ひぐ岩渕美うのえうゆの出
ゝゝ今ふも出産のうゝとある宗心どのふふり本[ヒイキ]おとろぎんのあ
うげその本くふよハ男でふり本[ワ功丞]どぐふ三本の進と出合の不モキット
情合がたうりまゝゝようふふり本りハふゝふ三ふあを抜せと
出ゝゝハ出ぬうゝぐふふり本せあるぐどふんゝもぬすまれそふふゝえ
本りまる[ヒイキ]ふゝハふぐ我そのゆうふ郷利ちるのハまぐ重擂ぐうんの
家ぐうゝたうゝ三本あも頼けさゆうゝりのおまゝのゆうふおうゝあうゝハ
合出ハ祭まも出のイヤふ平治の内ふすうゝうハおうくゝうゆくゝやら

きこえ　ちぢき〳〵

△小松屋宗右衛門　二番目　丹波屋八右衛門

[極]　まの羽織ふ

曽る葉の葉の月　これも義うさひざ栗色うてあるの　そふ　ふ　ぶ　ぶ

字右ちつどのふうりもり　[ロる口]　ぶ字右ちつどのゴ字右て　ぶ　羽織い　ぶ

めつさりのそふるの遠国うらい年葉とつんえる　衣　袴も　今ちあす

ハチト　袴不　袴ざのウ　ちし　ぶでうハ　月ぶ　今ん　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

[ヒイキ]　あれうう小平治の　住吉へ　まて　孫の　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

こ年ふる　仕ちちぢき〳〵　又二番目　ふすう　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

封きりの　仕迎　もよ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ふ〳〵そふふそフト　物りのふひ入ち　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

△亀屋母衣門　[ヒイキ]　葉の　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

指ふふふ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ふところより　数珠をとり　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

△高砂屋安千草姫　二番目　つちや梅川　[ヒイキ]　姫のつとりハ

金襴の帯ふ　紅仕立の振袖　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

袴ゴ　婚　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

あちこちはるふ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

来て　海老屋雲の　振そでふり　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ぶ　ぶ　美ふ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

さふ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

[極え]　さて　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ふふり　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

局　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

き〳〵又巻外あてあるとの引廻あげる〳〵てようふり手 板元 さて
みちのたい巻の裾りゆう第者のその帯の仇る出立お宮
まりの二人がかけご〳〵ぞつ〳〵りをきろうけ チョロンの新〳〵せふくも
きれて 踊入口 ト出る糸ふうけ稽古ようくいてそでい
ふり手もせぬう 引る口 ゆぶんいのけきどもちとふごをいふゆうぶごと
〳〵が舞台の結を拭とゆぐひで新をふくのく意味ごるいその
余いとんないひぶんす〳〵 さまとぶいたる夫大嘗り〳〵

〈夕涼長庫 鳴の小平治 二番目 艇屋新左衛門〉

新に拵たる巻 板元 との一番い物巻袖の新方様者ふ涙ふ家七
の自殺を図るふ平治ごのゆう手 ヒイキ ゆる孤あア〳〵の恨のせんどう
こうのふ世話ゆへ別ごんよふふり手 新新の件がすむと葬をあつこ
て出ての立ぶりゆぶんふり手もぬ長寿寺の門前でい岸ごんきの上下

ふ白第つ〳〵めれ〳〵ぶり動きもせぬ〳〵ら笑つて這入
ところ大稽ごつ〳〵ようふり手 書院ふすつて床のるのきり
ゆぶう西伴ゆあげけつこうでふり手 ヨヤ〳〵 衣ふ平治のすき
家立横大得の布ふいろみる新新らふふんえ家右ふふ出
逆て我ふをこころ〳〵さのを知り隙和目ふそれとまれぬゆう
ふおごろ〳〵仕形右今右ごれ〳〵 又笑空袋の道具ふふろて
三ちぶふ 巳 の大ごぶごとら英僧子の帯のえうるこうらく
時代ゆうの物ごうて世話ふぬける使うものを拵さこんるふへ
寄時の一人身代り前をこうすこと ころ 腹へ突込ごうら三本の
進へのいひうみきこふ大ごれ〳〵 ロる口 ダガ巻 傍ふ浪へふち
入る ふいわぶ〳〵 板元 次へ二寸目 振屋 指右ふつどのふう
ヤ ヒイキ ゆる孤蓋をごんの廣袖ふうけ三人でてうちんを拵て

出て来る丙文八右衛門が出しゝ身受の金を寝床を男等へ
土佐風がつんえけり 枕絡むとぞりましてかの茶しま縞の着付
にあなんどの長なあり耳の若やぎたる肩衣まで洒右衛門と六
がらりとかわりしは何も殊勝な百姓おやぢあとに由や 介ぬかり
きせぬ 幕口 出て来るにあらざの抜けぬとりの往きの千ト 仕舞ひ
あきませぬか 天竺浪人 ありやア若い人で五十年あまりの星ハあんなもの
盛ずらにも粋あり ある花に錦の評判も千年の鶴の生き
うかぶに小会にあらぬおやぢらの業めでたふ悦しけり

初楓扮戯子評判子

踊形容花競

一陽斎豊国画
柳水亭種清作
初編より十編まで毎年出板

口上

四方の御贔屓様方益々御清栄の属るとおつけ嬉美の品にあらざれば元を
狂言これまで演劇場の上にて看る絵も言ハされ八稼るところなく彼の
豊国大人が画ける似顔も好く彼らに一家の人々ご好評ならざるを猶よ
世とつれ細部に思ひさら巨小合巻にまき絵見る途中動く者を各さに
姿ある形あり非る骨肉あり宛然る人物が踊ぞる姿つきまるが如くその形容の色香
見続ぐる筋を採りつめ錦絵なるその場々交代毎に出板すべき義なく奉出を
続ぎお求めら令益々御覧の程偏に奉希上候以上

版元 甘泉堂敬白